

© 1969

日本文学全集 49

宇野千代集
中里恒子

昭和四十四年七月七日 印刷
昭和四十四年七月十二日 発行

著者 宇野千代
中里恒子

発行者 陶山 巖

印刷者 高橋 武夫

発行所 株式会社 集英社

〒101 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
電話 東京(265)六二一 振替 東京 二六五三

印刷 大日本印刷株式会社
製本 大日本印刷株式会社
製函 文京紙器株式会社
本文用紙 十條製紙株式会社
クロス 東洋クロス株式会社

落丁・乱丁本はお取りかえします
検印廃止

Printed in Japan

日本文学全集

宇野千代集
中里恒子

編集委員（五十音順）

伊藤 整

井上 靖

中野 好夫

丹羽 文雄

平野 謙

幀 伊藤 憲治

挿 装

絵

桂 ユキ子

目次

宇野千代集

色ざんげ

七

人形師天狗屋久吉

一四三

おはん

一七三

中里恒子集

乗合馬車

三三五

日光室

二六〇

蜘蛛

二七七

夜の橋

二六五

衣服

三九

遠い虹

三六

注解

三六

作家と作品

竹西寛子

三三

年表

四五

宇野千代集

色ざんげ

○

どこから話したらいいかな、としばらく考えてから彼はゆっくりと語りはじめた。外国から帰って間もなく蒲田に二階二間階下三間くらいの小さな家を借りて、僕は二階、女房と子供は階下とまるで別々の生活を始めた。もうそのころは別れ話もだいぶん進行していてただ具体的な問題の片づくのを待っているというだけだった。何しろ僕は十年ぶりに見る日本の女がきれいできれいで眼がさめると家を飛びだし街をほつき歩いたり夜はおそくまでダンスホールやカフェーを漁り歩いたりして帰ってくるという風で幾日も女房の顔を見ないことの方が多かった。ある夜のこと帰ってみると机の上に女文字の手紙が一通のせてある。高尾と署名してあるから高尾何子とでもいう女だろうと思つてあけてみるとそうではなくて中

には小牧高尾とちゃんと書いてある。いかにも高尾というような男名前に適わしい女の書いた手紙らしく達者な筆つきで二枚ほどの用箋に何か訳の分らぬ詩のようなものの書いてある後に、自分の家は千駄ヶ谷の徳川さんの邸の近くだからぜひ一度遊びに来てくれと書いてある。恋文というにはひどくあっさりした抽象的な恋文だし、僕はそのまま読み捨てて眠ってしまったのだが、その翌日も帰つてみると同じような手紙が机の上にのせてあつて、今度は詩のあとに返事がほしいと書いてある。翌日もその翌日も同じような封筒がのせてあつたが、僕はもう披いてみる気もなくそのままにしておいた。そして一週間くらいも根気よく手紙が続いてからあるときのこと、それまでの細長い封筒ではなくちよつと大型な西洋封筒に変わっているのを見て何気なく披いてみると、手紙のほかにその女のだという若い女の写真が一枚入れてあつたが、女の背後には虎の皮の拡げである椅子やピアノなども見えてなかなか中産階級的な長閑さだ。翌朝出がけに僕はそれを女房に見せてやった。「あら、お金持のお家らしいじゃあないの、あなたもう逢つてゐるんですよ?」「冗談言うな、向うから手紙を寄越したりする女に逢うものかい」「だけどちよつとくらい遊んでやつたつていいじゃあないの、きつとお金持よ」女房はなかなか

か洒落^{しや}れた口を利くが、写真の女はちょうどそれくらいしか美しくなかったのだ。そんなことがあってから後も相変らず手紙は来る。別に氣にとめているとも思わなかったのに僕は半分その女の根氣のよさに呆^もれながら、ダンスホールでもカフエーでも女を擧^あげては訊いてみた。

「君たちの中に小牧高尾^{たかみ}っていう女いる？」そんなことで僕も相當に手紙の女のことを氣にするようになっていたのかもしれない。ある夜のこと家に帰ってきて、机の側にちょうど五寸くらいの高さに積重ねてあるその手紙の中からでたらめに一つ抜きとって封をきってみるともうそれには詩などは書いてなく、明日の夕方六時から六時半までのあいだ、千駄ヶ谷の駅の改札口で待っているから来てくれ、わたしは髪に紅い造花の薔薇^{ばら}の花を挿^さしている、とただそれだけの文面が三行ほどに書いてある。もちろん僕は行きはしなかったのだが、いったいその次の日の手紙には何と書いてあるだろうと思ひながら次の日附のを抜いてみると、一字一句前と同じ文句でわたしは髪に紅い造花の薔薇^{ばら}の花を挿^さしている、と書いてある。僕はちよっとおもしろくなって今度はその前の日附のをあけてみるとやはり造花の薔薇^{ばら}の花と書いてあって、次のも次のもちょうどその晩届いたのも合せて十二三通ほどの手紙がみんな同じものなのには呆^もれてし

まった。僕はそれでもっと以前のに遡^{さかのぼ}って最初の二三通のところまでみんな封をきってみる氣になった。すると薔薇^{ばら}の花の前はおよそ七八通ばかりはどれにもあの虎の皮の上に腰をかけた写真が入れてあって、それ以前には訳の分らぬ詩が続いている。僕はしばらくそのおびただしい文反古の中に坐っている間にその女に対して異常な興味を感じはじめている自分に氣がついた。明日の夕方^あは行^いってやろうとそのときそう思いついた。

翌^あくる日の夕方、千駄ヶ谷の駅へ下りたのは六時二十分すぎくらいであった。フオームの階段を半分も下りたと思うと、その改札口のところ^{*}に背丈のたつぷりした若い女が真直ぐにこつちを向いて立っているのが見える。このごろよく雑誌などの写真で見^{*}るフェリシタ夫人のしているような工合に、長い髪^{*}の毛を編んでゆるく額の上に捲きつけそれに紅い造花の薔薇^{ばら}の花を挿^さしているのが、ちょうど夏の日のことだから六時すぎといつてもまだ昼のように外苑の方の明るい広場を背景にしておいて顔ははっきり分らぬけれども氣のせい^{*}か写真よりも若くいきいきした女のように思われる。側まで来ると、女はきらりと光るような眼をあげてまともに僕の顔を見た。僕はわざとゆっくりした足どり^{*}でそのまま広場を左手へ人力車の溜りの横を馬道に沿うて曲つて行^{*}ったが、

何となく背後から迫ってくるようなその女の眼が感じられる。こんなときはなかなか「あなたは小牧さんですね」などと言えるものではないとみえる。僕は女の眼の届かぬところまで歩いて行ってからちよつと立留つた。そしてその並木の繁みを透して駅の方を振り返ると、女はまたもとの姿勢に戻って後向きに立っている。やはり僕とは気づかなかつたのかなと僕はそう思いながらしばらくそこに立って見ていると、やがてくるりと向きをかえて真直ぐに徳川さんの邸の方へ歩きだした。たぶんきつかりと六時三十分になつたからなのだろうと思うが、いかにも機械的な動作で未練げもなくさつさと引上げてしまふのだ。僕はしばらく間をおいてから女のあとをつけた。駅から一町くらいいところを右に折れた角邸の徳川さんの家よりもつと厳しい石門のある中へ消えて行く。門札には「小牧与四郎」と出してあって、古びた薔薇の植込がとんねるのようになって奥庭に続いている。女の草履の音がまだその奥で聴えるようなのを僕はちよつと度胆を抜かれたような気持でそこに立って耳をすましていたが、やがて八幡社の方の通りに近いところに一軒の米屋を見出してその親爺に訊いてみると、そこは小牧与四郎という三菱の重役の家で、主人の与四郎は中国や台湾などに旅行していることが多く、留守中はこの間

まで*華族女学校に行っていた一人娘のお嬢さんがいるきりだとそんなことまで話してくれた。そのお嬢さんというのがあの女なのだろうかと僕は何となく猟奇的な興味に駆られながら、しかしさつき改札口のところでちらりと見た女の大柄な厳つい体つきや僕の方を見たときの光るような眼つきなどを思い合して恋を感じるといふのは少しの感傷も柔かさもない女のような気がしたが、それにしてもこのごろのように夜となく昼となくカフエーダンス場などに入りびたつてそんなところの女たちとばかり遊んでいる僕にとつては何か新鮮で風変りな相手のように思われた。その日はそのまま、もう街へも遊びに廻らずに家へ帰つてくるとやはり机の上には紅い薔薇の花をといて手紙が置いてある。そこで翌くる日は少し早目に家を出て床屋に行き途中で靴を磨かせたりして千駄ヶ谷のプラットフォームに降りると、女は昨日と同じところと同じ姿勢で真直ぐに立っている。僕の姿を認めたと思うと一種の確信のある足どりでつかつかと近づいた。「湯浅さんでしよう？ やっぱり湯浅さんですわね」そうだと答えると、「あなた昨日もここへいらしたでしよう？」と言う。何だか正直に答えたくないだったので、いや、いまここへ来たのが始めてだと言った。「そんなことないわ、でもあんなに急いで行つておしまいになつた

からひよつと違つた方かと思つたけど」「じゃああなたは毎日ここで待っていていたんですか?」「ええそうよ。だってあなたはきつといらつしやるに極つてゐるんですよ」「女はさきに立つて歩きだした。僕はそのあとを追いつながら女がよく發育した手足や血色のいい頬を見た。「どういふわけであんなに毎日手紙を寄越したんです?」「そんなこと訊くもんじゃないわ。もしあなたが来なかつたらこれからさき三月でも三年でも続けて出すつもりだったの、何でも思つてゐることを途中で止したことなんかないのよ、あたし」女は昨日の石の門の前で僕を振返つた。「ちよつと寄つてらっしゃらない?」僕は女の後から薔薇の繁みのとんねるを潜つて裏庭の方にある離れの洋館へ上つて行つた。部屋の中はもう少し暗かつた。女は低いスタンドの紐をひいた。するとその仄かな明りの中にあの写真にあつたピアノや虎の皮のかけてある椅子が見え、それから壁にピンで留めてある新聞からの切抜きらしい僕の写真なども見える。「お酒のむでしよう?」女は僕に何かの洋酒をすすめた。間近に見る女の顔は女というよりもまるで子供のような稚げな表情をもつて、その子供らしさのために恐れを知らぬという風に見える。「どうして僕に逢いたいなどと思いついたのです?」「まだそれを訊きたいの?」女はちよつと笑つた。

「あなたが好きだからよ。あたしあなたを愛してるの」「愛してる」僕は笑つた。「愛してるってあなたはこれまでに恋愛なんかしたことがあるの?」「あるわ。あたし一とう最初はうちの家庭教師を愛してたのよ。でもじきにそんなことをしてるのがばからしくなつたの。ばからしいと思つたらその日に、自分であたしその男を蹴にしたわ」さつきからもうだいぶん時間が経つけれども誰もこの部屋に来るものはないし、母屋の方からも物音が聴えない。「じゃあどうして僕のことを好きだと思つたの?」「あなたに汽車で逢つたからよ」みんな話してしまふわと言つて女の語りだしたところによると、彼女は僕が日本へ着いた日に神戸から東京まで乗つた汽車の中で僕といつしよになつた。台湾から帰ってくるその父を大阪で待合せてやがて食堂車で少しやすんだりして座席に戻つてくると、すぐあとからやつてきた僕が彼女の食堂車に置き忘れてきた扇をこれはあなたのだでしょうと言つてその父に渡したのだと言う。そう聴けばそのときのことを思いだすうだけれども、彼女だつたのだらうかと思われるその少女は紺色の水兵服か何かを着て絶えずうつむいて編物をしていたようだったので僕にはまるで覚えがなく、かえつてその側に坐つていた白髪の老紳士の脂ぎつた額や鋭い眼ざしの中に彼女のそれに似通つた

ものがあつたかと思われる。その夜汽車が東京駅に着いて家族や友だちなどに迎えられ新聞社の写真班に囲まれている僕を見てあれは何者であろうかと翌朝の新聞をたのしみに披いてみて僕が外国にながいに間いた湯浅譲二という洋画家で蒲田の留守宅に落着いたということを知ったけれども、しかし家に父の留っている間は何をするともできない。「あたしとても上手に二人の人間になれるのよ。パパのいる間はそれはおとなしいお嬢さん、パパがいなくなると手のつけられない不良少女になっちゃうの」いつでも両側に女中が一人ずつついていて自動車の窓から外へ眼をやることも禁じられているようなお嬢さんもやるのだけれども、不良少女の役の方がもっと上手にやれる。早くまた父が台湾へ行ってしまえばいいとそれでも二十日くらいも待ったのち、やっとある日のこと父を東京駅へ送りだしてしまふとその足ですぐに蒲田の警察署へ行って僕の新しい住所と家族について調べてもらってから、人力車に乗って僕の家の前まで行ってみた。もう少しではいろうと思つたけれども思いなおして引返し、それから毎日のようにあの手紙を書いたのだという。「じゃあ僕におくさんや子供のあることも知ってるんですね?」「そんなこと」と女はそのうすい唇を反すようにして言った。「そんなことはだつてあなたの

ことじゃないの、何でもありやしないわ。どんなおくさんだか知らないけど、でもそんなおくさんなんかよりあたしの方がいいにきまつてるわ」「どうしてきまつてるんです?」「きまつてるわ」独り言のように繰返してからちらりと眼をあげて僕を見た。「あなたみたいなひとがあんなお家にいて画を描いているなんて」そう言つてちよつとの間口を嚙んでゐる女の横顔を見ているうちに彼女の言おうとしていることが僕には判るような気がした。この華族女学校のお嬢さんはいくらか僕の暮し向きについて僕を憐んでゐるらしく、そうでなければ案じてゐるらしい。僕はちよつと、小さな子供におじさんはばかだねと言われたときくらいに機嫌を悪くした。その機嫌の悪さを隠そうとするためのように僕はそつと女の手をとつた。「だめよ、触っちゃだめ」とび上るようにして女は部屋の隅の方へ体をにじらせてから、そこからじつと眼をすえて僕の方を見た。僕はしかし女を追つては行かなかつた。やがてあんまりおそくなるからと言つてそこを出ると、女もつづいて駅まで送つてきた。「また明日ね」女は別れるときにそう言つた。

翌日になるとしかし僕はもう出かけて行く氣がなくなつていた。恋をする相手というにはあんまり衛生的な体つきと率直な性格とをもっている彼女はほんの少しの感

傷しか僕の心に残さなかったようなのだ。それにほんとうのことをいうと僕にはまだいくらかあの「面喰い」の氣持が残っていて、そう美人というほどではない彼女をむきになって追い求めようとはしなかった。そのうちにだんだんと日が経って僕は自分の仕事の一つである秋の展覧会に出品するための制作が忙しくなってくる。「こんなに情熱に燃えている女をそのままにしておくなんて罪悪だ」と書いたり、「逢いに来てくれなければ何をするか分らぬ」と書いたりした女の手紙が相変らず毎日のように来ていたが、ある夕方僕は珍しく自分の家の二階で声楽家の亀井雄二郎や画家の園田修吉などといっしょになつて女房の給仕をうけながらビールをのんでいると階下で誰かを呼んでいるような子供の声が聴える。すぐ降りて行つた女房が階段のところから僕を呼んだ。「あの女よ、あの女があなたを呼んでくれて言つてるのよ」近所の八百屋の門さきまで来てその子供を呼び出しの使いに寄越したのだと言いながら、そう言っている女房の白粉をつけた白い顔は固く硬つたような表情になつてゐる。いつだったか写真を見たときには、ちよつとくらい遊んでやつたつていいじゃないのなどと利いた風なことを言つていたくせに、と思ひながら僕はまた何か言つたりするのが面倒だったので大きな声をして言つ

た。「かまうことはないじゃないか、誰を待っている」と待つのは向うの勝手じゃないか」「だつてずうずうしいつたらないんですもの。さんざんへんな手紙をよこしといて、今度は呼び出しに来るなんて」「どうしたんです？」音楽家の亀井がしかつめらしい顔をして訊くと、女房はそのままそこへべたりと坐つて、さも憎さげな調子をもつて客に女のことを話した。「しかし君、そんなのをいつまでも放つとくのはいけないよ。興味が無いんならないつてはつきり君の口から断つてやるのがほんとうだよ」「断つたつて同じなんだよ」やがて三十分もたつと思うと今度は表から近所の傳屋の親爺がやつてきて、ちよつとそこまで僕に来てくれと言う。あとで行くからとそう言つて傳屋を帰してやると、亀井は真顔で僕の方へ向いた。「あんなどころで待たしとくなんていけないよ。おくさんも僕らもこうして坐つてゐるんだからその前ではつきり言つてやつたらいいじゃないか。そうしたまえ」まじめな氣持というよりは見物人のおせっかいな氣持からであらうと思うが亀井は自分で傳屋の前に待つてゐるという女を呼びに起つて行つた。間もなく亀井といつしよに女がやつてきた。僕らの晚餐は何だか會議でもひらいてゐるように固くなる。その中でも女房は一番遠くの方から明らかに敵意を見せた構えをもつて女の顔を

見詰めてゐる。「いまも話したのですが」亀井はそう女に言った。「あなたのような若いお嬢さんが湯浅君のような男に夢中になるといふのはどうですか」「どういう意味ですか？」女は詰問するように亀井の顔を見た。

「いや、どういふ意味といつてしかし、湯浅君にはおくさんもあるし子供もあるし」「知ってますわそんなこと。でもそんなことはあたしに何にも関係のないことですもの」「まあ、何ですって」女房はかつとなつたような声を立てて言った。「まあおくさん、僕に任せといてください。ねえ小牧さん、僕の言つてゐることはたいへん常識的なことかもしれないが、どうせだめなことにきまつてゐるのに」「きまつてなんかないわ」いまの彼女にとつてどうすることもできないのは僕を好きだといふ彼女の氣持だけだ。そう言つてゐる女の様子は、側に僕の女房のゐることなど猫の仔のゐるほどにも思わぬらしい。亀井は「ふうむ」と呻るような声を立てた。そういうありさまの亀井もそれから女房も何だかそわそわと狼狽わづかてゐて、この席で落着いてゐるのは彼女ひとりのようにも見える。「失礼ですが、今夜は僕がお宅までお送りしましょう。けつして悪いようにはしませんから」やがて亀井はそんなことを言つて女をつれて出て行つた。そのひよろひよろと高い後姿が隣りの生垣の向うに消えるの

を二階の手摺てすりによりかかつて見送つてゐた女房は、いらして言つた。「何て甘い男ばかり揃そろつてゐるんでしょ」

翌日ひる過ぎにまた亀井がやつてきた。「君はばかだよ」僕の顔を見るとすぐにそう言つて「小牧与四郎といふのは君あの有名な三菱の小牧与四郎なんだぜ。こんな幸運をみすみす逃がしてしまふなんてばかだよ。それにあのお嬢さんはちよつといいじゃないか、あんなにはつきりしてゐる女の子つてないぜ」「はつきりしすぎて、氣違ひなんだよ」「しかしあの氣違ひぶりはおもしろいじゃないか。ちよつと下賤げせんな女の子の持つてない味だぜ」亀井はむやみに感心してみせてからちよつと声を落して、じつはゆうべいっしょに家まで送つてゆく途中で今日君を女の家まで連れて行く約束をしてしまつた。悪いようにはしないからぜひ俺の顔を立てろと言ふ。「がみがみ言うな、行つてやるよ」いつの間にか亀井の仲人きんと口くちのつてみる氣になつた僕は日の暮れるのを待つていっしょに家を出た。女の家の前まで来ると亀井はさきに立つて表玄関から案内を乞うた。古風な装飾をした広い応接間でしばらく待つてゐるとやがて扉があいていつものようににこりともしない顔のまま小牧高尾が現れた。「亀井さん、もうあなたのご用はこれですんでよ」はい

るといきなり僕の方も見ないで亀井に言う。そこへ女中がアイスクリームか何か運んできたので亀井は急いでそれをとった。「しかしこれをたべる聞くらいここにいたっていいでしょう」亀井はいつの間にか彼女に対してとることなきめていたらしい道化者の態度をもってそう言いながらそこそこ僕を残して辞し去った。ちよつとの間だまっていた女は、これからちよつとそこまでいっしょにつきあってくれないかと言う。銀座へ出て茶でも喫もうかと僕も思つたので出かけようと答えると、そこへ女中がまた茶菓を運んできた。「さっきのこと、よくって？」女はそんなことを訊く。「はい、お車ももう参っておりですけど」裏木戸をあけたところに一台の大型な自動車が出ていた。僕は女と列んで腰を下しながら、「ママは？」と訊いてみた。亀井の話によると彼女の母はその父のいない間この留守宅に残っているはずだというのに、と思ひながらしかし僕はそんなことなぞ少しも気にしてはいなかったのだけれども、女はちらりと冷い眼をして僕の方を見た。「ママにはママの楽しみがあるわよ」あとで分つたことであるが、この高慢な不良少女のお手本はみなその母の行動によつたものであるらしく、僕はその夜、三十二にもなった男である僕がこの十八の少女にホテルへ連れこまれたのであつたが、そのホ

テルというのは彼女の母の用い馴れていた恋の宿であつたらしく、さがた女中に念を押していたこともその用意のことであつたのだ。自動車は暗い街を走り過ぎる。ぼつりと窓に雨滴が落ちたと思うと、ざあと音を立ててすさまじい雨になつた。僕はそれとなくその雨の中を掠める灯りによつていまどこを走っているところなのか知ろうと思つたが、十年前の東京の街に対する僕のおぼろげな記憶はたちまち豪雨の中にもみ消されてしまつて方角さえ分らない。僕はしかし女にもまた運転手にもいったいどこへ行くところなのかなどと訊こうとは思わなかつた。どこへでも行くところへ行つてやろうとそんな興味もあつて、僕は女の何となくものものしい感じでおしだまつているありさまを滑稽なものに思つたのだ。やがて車がとまると暗い木立の奥から白い服を着た男が走つてきて女に傘をさしかけた。そこはホテルなのだ。僕はまだあるいはそこで夕飯を喰べようというのであろうかとそんな風に思つたのであつたが、女は落着いたものごとくでボーイたちの慇懃な目礼の中をロビーを抜けて暗い廊下の方へゆつくりと歩いて行く、すると背後から一人のボーイが追いかけてきて女の手に部屋のカギを渡すのだ。女はある部屋のカギをあけた。すぐあとから僕が続いてはいるとがちゃりと扉に鍵をかけた。「驚いたな」

僕はそう言った。「あなたのしてることはそれは男のすることですよ。僕があなたにすることですよ」「そうよ」女はまだいま鍵を下した扉のところに起って肩で呼吸をしていた。「今日はそれをあたしがするのよ、こんな場合に男がすることにあたしがするんだわ」女の眼は何か敵意のある光りで燃えているようなのだ。ちよつとの間僕の立ちすくんでいるひまに女はベッドの側に近づいて、着ていたうすい紅色の着物をぬぎはじめた。帯をとると、するりと着物が床におちる。一条も纏わぬ裸体は、びっくりするほど艶かしかった。着物を着ているときの女を見ていては夢にも想像のできない、その白い肌の柔かさは手を触れたらそのままつわりついて離れないのではあるまいかと思われるほどだった。おそらく女はこのことを充分に知っているのであらう。そしておそらく着物を脱いだ彼女はどんな男の心をもとらえることができるに違いないということを。僕は半ば呆然として、ふいに燃え上ってくる喰べ物を見せられたときの動物のような自分の心と闘った。不思議なことであるが、これに似たほかのどんな場合にでも画家である僕の本能は女の美しい肉体をそのまま自分のものにしたいと思つたことはなかった。それなのに、この女の体はほかのどんな欲望も自制も押し殺してしまふほど僕の心を圧倒

した。不覚にも僕はこのとき、いつか女が話したことのある女とその家庭教師との恋を妄想したのだった。「何をぼんやりしてるの？ あなたはそんな意気地なしなの？」女の声が鞭のように僕の頬を打った。僕は息をのんでいた。何ということを言うのだ。こういうことを言われた男が何をするか、この女は知っているのだらうか、と思わず僕は荒い気持になって女の体を抱き上げると、ベッドの上へ叩きつけるようにして転がした。ぐさつと音がしたようだった。女は肩で息をしながら眼を大きく睨いたまま、さあ、どうするのよ、とでも言うようにじつと僕を見詰めていた。僕はもう獣になっていた。片手をふいに女の胴に廻すと、柔かいその乳房の間に顔を埋めた。あ、と女は短い叫び声を立てた。僕は動かなかった。もし僕が声を立てることができたならばこんなことを言うつもりであった。「どうするか見ていろ。夜があけたらもうお前の体はなくなっているだろう」ふいに女は身悶えして両手で僕の体を突き上げようとした。そして狂気のようになって僕の腕といわず胸といわずところ嫌わず歯を立てた。何ということだ。さっきまでのあの人をばかにした不良少女の挑戦とこの激しい抵抗とは何を意味するのであらうか。僕は女のなすに任せながら少しも手を離そうとはしなかった。突然、女が首をがくつ